

# 越境する「個人」の信仰の変容

——海外在留邦人の日本語キリスト教会への入信過程を事例に——

一橋大学大学院 箕浦よはな

## 1. 問題設定・先行研究

本報告において、越境とは国から国へ個人が移動することを指す。現代社会において、グローバル化によって多くの個人が越境する中で、「コスモポリタンな宗教状況」が各国において広まりつつある。ウルリヒ・ベック（2008 = 2011）によれば、「コスモポリタンな宗教状況」とは、各世界宗教が個人化する中で、それらが多元的かつプラグマティックに共存する社会的様相を意味する。「コスモポリタンな宗教状況」が共存する様相を捉えることを目指した移民にとっての宗教及び宗教団体の事例研究が多数存在し、それらの大多数は、民族的アイデンティティを通じて生み出される「共同性」を通じて信仰共同体が成立すると述べている（滝澤 2015）。しかし、移民の信仰共同体における「共同性」の論理は、「コスモポリタンな宗教状況」下における移民の宗教及び信仰に関する理解を一元化してしまう。そこで、本研究では以下3点を問いとして設定する。

- (1) 「コスモポリタンな宗教状況」で移民はどのように他者の宗教的体系を引き受けていくのか。
- (2) 引き受けた宗教的体系に基づいて、移民は移住先の宗教的体系をどのように判断していくのか。
- (3) (2) を通じて、移民の宗教的实践はどのように変化していくのか。

以上3点を検討するにあたって、本研究では、インドネシア・ジャカルタにある日本語キリスト教会「JJCF (Jakarta Japanese Christian Fellowship)」を通じてキリスト教に入信した海外在留邦人を移民とする。

## 2. 方法

JJCF にて受洗した在留邦人に半構造化インタビューを行った。分析に際し、(i) 来インドネシア後の生活、(ii) 入信をめぐる人間関係、(iii) 受洗後の信仰生活に関するナラティブに着目した。

## 3. 結果・結論

分析の結果、3点の問いに対して以下の結論が導き出された。(1) 宗教的体系を民族的共同体に依拠した人間関係の中で引き受けていくことが明らかになった。(2) 宗教的他者の宗教的体系ではなく、その宗教的体系にて重要とされている宗教実践を通じて、他者を判断していくことが示された。(3) 他者の宗教的实践を、自身の宗教的体系に置き換えて実践していくのではないかと推測できた。以上の結果から、「コスモポリタンな宗教状況」にて、個人が自身の宗教及び信仰を再帰的に選択するには、個人が宗教的体系を獲得しているかが重要であることが推測できる。

## 参考文献

Beck Ulrich (2008), *Der eigene Gott? von der Friedfertigkeit und dem Gewaltpotential der Religionen.* (鈴木直訳, 2011, 『<私>だけの神—平和と暴力のはざまにある宗教』.)

滝澤克彦, 2015, 『越境する宗教? モンゴルの福音派』 新泉社.